

戦場の祈り

言の葉大賞 最優秀特別賞 早稲田佐賀中学校3年板垣仁菜

やっぱり熱がある。学校が休みになって一ヶ月。外出してもいない。喘息ぜんそくの弟がいるから、感染には十分注意していた、つもりだった。私は手が震えた。味はする？頭が真っ白になった。誰に相談しよう。そう、もう一ヶ月母は家に戻っていないのだから。

私の手元には母の遺書がある。何かあった時の連絡先が書いてある。いつ用意したのか、数年先の私の成人式の着物の受け取り場所まで書かれていた。母に会えるだろうか？家族にうつせば、大好きな笑顔は奪われるだろう。弟は本当に乗り切れないかもしれない。大きく鳴る心音が鼓膜こまくを揺らし、痛みすら感じる。

恐怖で手が震えた。自分を恐ろしく思った。次々と恐怖の波は襲ってくる。私は、母が感じた恐怖を実感した。

呼び出し音が三回鳴る前に、懐かしい声が聞こえた。いつも私の電話はすぐにとつてくれるから、私は邪魔じゃましないようにしていた。「私、熱があつて」いきなり電話が切れたが、四十分後に、母が白衣姿で家に現れた。母はすぐに私を車で自分の病院に連れ、診察をしてくれた。熱がある私を母の職場は嫌がるのではないかと心配したが、皆が温かく声をかけてくれた。結果を待っていると、不安そうな面持ちの人が診察室に呼ばれては、しばらくすると安堵した表情で出てくる。幸い私は新型コロナウイルス感染ではなかったが、そうであってもそうでなくとも、母達医療者には関係ない。彼らは最前線にいて、自分の恐怖の壁を乗り越え、人々の不安へ手を差し伸べている。母は、家族を守るため、自宅に帰らない方

がよい、と泣きながら遺書をくれた。私は自分を躊躇なく迎えてくれた医療者の笑顔を生涯忘れることはないだろう。恐怖や不安は誰かを差別しても解決しない。まやかした。皆で心の恐怖の壁を乗り越え、医療者への差別をやめ、強くなる。そう、明日救われるのは自分かもしれないのだから。

言の葉大賞

全国の小学校・中学校・高等学校より、毎年のテーマに合わせた大切な人への思いや強く感じた気持ちをも自分の言葉で綴る作品を募集し、その優秀作品を言の葉大賞として顕彰する。2020年のテーマは「壁」。(主催 一般社団法人言の葉協会 <http://www.kotonoha-taisho.jp/>)

前ページの「戦場の祈り」を執筆された板垣仁菜さんに、本書への掲載の許諾をお願いしましたところ、ご快諾をいただきました。ところが、その数日後、思わぬことが起きてしまいました。

仁菜さんのひいお婆さんが亡くなられてしまったのです。実は、ひいお婆様の退院を目前に、病院でコロナ患者が発生してしまい、ひいお婆様も濃厚接触者として隔離病棟に入院されていたのだそうです。

その日、仁菜さんから、当編集部にメッセージと作文が届きました。

「本日亡くなった、『ひいばあ』のために私にできることはないかと、考えました。何もできないから、編集される方にわたしの思いを伝えていただければと思います。ただ、家族がどんな思いでいるか、コロナにうちかつ本をまとめてくださいと、なんにもできない私はただ、そう願うことしかできません」

約束

板垣 仁菜

今日、ひいばあが死んだ。

コロナ病棟びょうとうにいたひいばあに、ようやく会えた。1ヶ月ぶりだった。

ひいばあは、恐ろしいほど瘦やせていた。

私はひいばあの手を握ることすらできなかった。

96歳で、戦禍せんかを乗り越えたひいばあ。

戦争で家族を失っても、原爆が投下された日を経験しても、ただ、働いて生き

てきた命を、今日このウイルスが奪うばった。

病院でどんなに不安だったろう。

どんなに苦しかったろう。

要塞ようざいのように封鎖ふうさされた病棟びょうとうで、ひいばあを目にうつる景色が青空でなかったことを、私は一生許せない。忘れないう。

このウイルスは、狡猾こうかつだ。健康な人の体を媒体にして、弱い人々を狙ねらっていく。

健康な人には重症化させないことで、まるで共存できるかのような甘い期待をいだかせた。

健康な人のウイルスへの恐怖の感覚を鈍麻どんまさせて、弱い人々へウイルスを運はせる。

ひいばあは、命を持って教えてくれた。最後までたたかって、教えてくれた。

決してコロナを侮あなどるな!!と。

恐怖を忘れてはならない。正しく恐れ、ウイルス根絶こんぜつを諦あきらめてはならない。この狡猾こうかつなウイルスの罠わなにおちてはならない。

ひいばあ、見える? 青空だよ。

昨日までの吹雪が嘘うそのように、今朝は紺碧こんぺきの空が広がっている。

ひいばあが死んでも、街は変わらない。

ニュース番組が流れても、ひいばあが死が知られることはない。

だけど、私はひいばあを死をちっぽけな死なんかにはしない。

私たちは変わるのだ。

もう二度と誰かの大切な人を奪われないよう、ウイルス根絶をめざしていく。

報道されない死の影に、きっとそう、同じように思っている人がたくさんいるのだから。